

平塚新田集会所所在 石造物調査報告

—旧平塚新田村「薬師堂(白源庵)」由緒—



令和4年（2022）10月

調査 熊谷市立江南文化財センター

平塚新田集会所所在石造物

令和四年(二〇二二)十月二五日調査

種別

法量

建立年

銘文等

1 【戦災復興集会所再建記念碑】

高一三六・幅六六センチメートル

昭和二十一年(一九四六)

表現

文字塔

背面に関係者名一覽―略

前 戦災復興集会所再興記念碑



2 【二十二夜待供養塔】 高一〇六 幅四〇・厚二〇センチメートル 文政十三年（一八三〇）

表現 蓮座に半跏する六臂の如意輪観音像半肉彫り、下位に銘文を刻む。 台石別により

具一切功德慈眼視衆生

前 二十二夜待供養塔

福聚海無量是故應頂禮

後 文政十三庚寅年十月吉日 武州大里郡平塚新田村

（台石） 前―講□ 左―お□ 右―お□

※ 講中の人名を記していると思われるが、埋没しているため不明



【馬頭観音塔】

表現 草書体の文字塔

彫りが深く流麗な文字 美品

台石に組む

高二三八

幅四六・厚一六センチメートル

緑泥石片岩

文政十年(一八二七)

前 馬頭観世音

後 文政十丁亥年十月吉日

武州大里郡平塚新田村



講中

堀 七蔵

同 又八

同 與五兵衛

同 長三良

高田 兵六

同 善左衛門

関口 半五良

中島 善兵衛

小彼 房左衛門

小池 安三良

4 【庚申塔】

高二八 幅四七・厚二八センチメートル 小松石 正徳六年（一七二六）

表現 青面金剛尊―八臂像 日月・二鶏・三猿の装飾、主尊の左右に銘文、下部に奉納者の氏名を二段に刻む 台石上に乗る

前 正徳六 丙申 天 正月吉日

（下部） 武州大里郡上吉見領平塚新田村



堀	六左衛門	小彼	七兵衛
同	吉左衛門	同	金次良
中島	小右衛門	同	右兵衛
内田	武兵衛	同	善□
曾根	六右衛門	山下	仁兵衛
中島	孫兵衛	同	弥□
同	善兵衛	黒□	九兵衛
小彼	弥兵衛	高田	伝兵衛

※□は判読不明文字

【二十二夜待供養塔】

高七三・幅三三・厚一七センチメートル

台石あり 宝暦七年（一七五七）

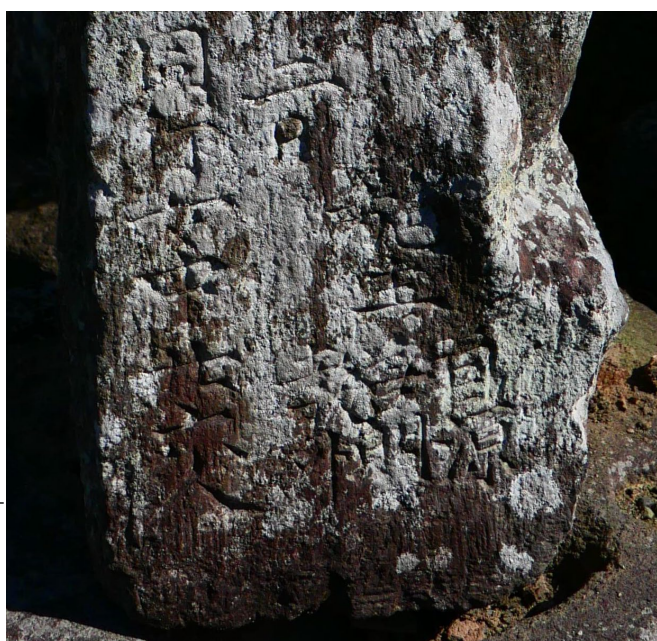
表現 苔蝕が進み像容・銘文不明瞭 六臂の半跏如意輪観音像 天衣が翼状に広がり、持物を細部まで刻む 銘文は側面にあり

右側面 二十二夜待供養塔 武州大里郡上吉見領平塚新田

左側面 于時宝暦七丁丑世十月廿二日 施主 自源禅門

敬白

同行女中廿六人



【聖徳太子塔】

高一〇六・幅三四・厚二三センチメートル

台石あり

天明八年（一七八八）

表現 頭部に笠唐破風を彫り出し、聖徳太子立像を半肉彫、台座を表す。上半部と左右に銘文

台石別に所在

上半部 開演妙法度衆生

從於西方來誕生

伝燈東方粟散王

敬礼救世観世音

脇

天明八戊申龍集□□吉祥日

（台石） 方形一四九×三七

前―講□

・左―當 下 本 など

・右に銘文あるも埋没のため不明



【廻国塔】

高九一・幅四〇センチメートル 下端部埋没

天保十二年（一八四〇）

表現

自然石使用の刻字塔

緑泥石片岩

前面におよそ三行に分けて銘文を記す

本願主肥前松浦

世 筑前茂右工門

光山

話 肥前吉兵工門

天下和須

天保庚子三月吉日

人 寄附 津田村盛多吉右工口

奉納大乘妙典六十六部日本廻国塔（以下埋没）

右 中 左

日月清明

肥前松浦郡住人 雲山洞天行者 俗名松永直次郎



【光山了雲行者墓碑】

高五三・幅二七・厚一九センチメートル

文久三年（一八六三）

表現

角柱状石 文字刻字

前面と側面に銘文

前 光山了雲行者

右 文久三癸亥年八月十三日

左 肥前国松浦郡下龜村産

俗名 加藤吉蔵享年八十七才



【了覚沙弥墓碑】

高五四

幅二五

・厚二五センチメートル

天明元年（一七八二）

表現

角柱状

刻字塔

前面に銘文三行

台石あり

右 天明元辛丑天

三列失祭郡

歸眞 了覚沙弥

左 十一月七日

桑□村相泉寺 弟子





10. 【自源達士墓碑】 高四〇・幅三四・厚三四 センチメートル 台石あり 明和二年（一七六五）

表現 無縫塔 上部 阿弥陀梵字 文字塔 苔蝕が著しく銘文不明瞭

明和二乙酉年

開 勝拳

梵字 キリク 蓮蓮社 自源達士

山 木宝

二月朔日

11. 【二十二夜供養塔】

高(台石から)一一二・ 幅四十・四五・ 基部幅三〇センチメートル

表現 如意輪観音の八臂胡座像 全身丸彫、細部数珠の表現まで残る 基部台石に銘文

前 二十二夜待 (以下埋没)

右 平塚新田 女人講中 十五人





現況 東から西方向



現況 南から北方向

石造物の現況などについて

【現状】

石造物は現集会所の南側に集積されており、基礎や台石の所在から従前よりこの場所にあったと思われる。台石や地盤の沈下によるものか傾いている塔や倒れたままの塔が散見される。保存のための立て直しは基礎から行うことが必要と思われる。

【由来】

当所平塚新田は、地誌によると旧万吉村の分郷ともされ、享保十八年（一七三三）の検地後に自立したとされる。村内には八幡社・稲荷社が鎮守に当てられ、「薬師堂」が明記され「自源庵」と称したという。この薬師堂が現在の集会所の前身で、墓碑10の石塔はこの薬師堂を開山した自源のものである。

蓮蓮社は浄土宗の一派をいうもので、熊谷寺をはじめ市内各所に認められたが、明治維新後廃寺となった例もあったようだ。石造物の年号から、平塚新田村の成立した江戸時代中期以降から幕末までの間石塔造立が続けられたようで、おそらく薬師堂の存続期間と一致するのだろう。

【個別の石造物】

確認された石造物は十一基で、昭和期の1を除いた他は、すべて江戸時代中～後期に造られ建てられたと思われる庶民信仰による石造物であった。内訳は、2・5・11が「二十二夜待供養塔」、3が「馬頭観音塔」、4が「庚申塔」、6が「聖徳太子塔」、7が「廻国塔」、8・9・10が「個人墓碑」であった。

石造物の属性や特徴などについては、個別説明に記したので、各地の例と比較して特徴を見てみよう。

○1は戦災碑とされるものは、戦災の内容が不明、熊谷空襲の余波を受けたのであろうか。

○6の「聖徳太子供養塔」は珍しい。市域では文字塔が多いが（野原文殊寺境内など）、本例は太子十六歳の少年像であり、太子の父の用明天皇の病を癒す祈りをささげる「孝養像」と言われるもので石仏の類例は多くない。彫刻（行田市天洲寺―国重文）や絵画などには多数みられて、太子を讃える言葉が像上部に四行見えることから絵画の形式を写してこの石仏が造られたと想定される。太子の持つ香炉部分は欠けているが、全姿の彫刻や文字の配置など精緻な作り込みで、当該例では優品であると思われる。一メートルを超える大形品であることや入念の作例であることから、江戸市中の石工の製作のように思われる。また、埋没しているが台石があり、講中の人名などが刻まれていると思われる。

○4の庚申塔は、市内でも江戸時代中期頃によく見る作例で、市内の旧村単位の路傍や寺院で見つけやすい。賽ノ神の信仰と一緒にあって、青面金剛という憤怒の仏(悪疫や悪心を調伏する役目を持つていた)を表現し村に入る悪いもの防ぐと考えていた。本例も表情や持物(六臂―六本の腕を持つ 法具―輪宝・弓矢・矛・繯索)が良く表現されており、残りも良い方と思われる。

下部に記される氏名には1の碑と同一姓がみられ、江戸期からほぼ現在まで各家が続いていることが窺われる。

○3の馬頭観音塔は、草書体で書かれた文字塔であり、緑泥石片岩(小川町青山付近や長瀬町野上付近で採取)の加工していない剥離面に彫刻する。筆者の記名がみられないが、同時代では、僧侶などの作例が多い。背後に「講中」十人の名が刻まれており、日常的に馬を使用することが多い農家や荷運びの請負者らが仲間を募って、運行の安全を祈ったものだろう。熊谷宿での傳馬役には、農家が使役されており、負担も大きかったとされ飼馬は大切な身内であった。

○7の廻国塔は、日本国の六十六カ所の霊場を巡り納経をするもので、成し遂げた証に造塔するものであった。本塔の造立者は、銘文によると肥前松浦出身者である、現在の佐賀県松浦郡にあたり、どのような縁でこの地での造立に至ったのか知りたいところだが、世話人の一人に、津田村の盛多氏の名があり、肥前出身者との繋がりがあったのだろうか。

本像の大仏で知られる平戸の源宗寺の開基とされる藤井氏も肥前国出身で宗門は同じ浄土宗であることが関係するのかもしれない。もしかしたら、肥前出身の松永氏が結願で造塔したということは、この地に留まり生涯を終えたということだろうか。肥前出身者が二名いるということは、同郷人あるいは縁戚のものであるうか。

○二十二夜待塔は三基あり、5・11・2の順に継続して造られたものと思われる。11の造立年ははっきりしないが、およそ三十年句切りとすると、一世代程度での代替わり時期に女衆の講中によって建て続けられたと思われる。庚申講が男性の度合いが強いのに対し、二十二夜待は女性の講中であつた。いずれの塔も形が異なっており、11は全姿を丸彫した人体像となっている。細部まで表現されており、蓮座や台石を伴った入念作といえる。2の離れている台石には講中の女性名が刻まれていたと思われるが埋没しているため不明である。

○墓碑三基は江戸後期の三人の薬師堂の庵主と考えられる僧侶のものであろう。それぞれの塔に出自が記されたようで、8は肥前国松浦郡(佐賀県)、7は三州(愛知県)の出身のようだ。「失」は「矢」の誤字か。薬師堂を開山した自源の出自は不明だが自源の没年が明和二年(一七六五)なので、六〇歳前後の死没年とすると、自源の青年期は平塚新田村の開村と符合するので、村の仏堂の建立を中心となつて行つたとも考えられる。里の修験者・俗界の出家者などが薬師堂の護り手とともに日常の仏事や祭事、

まとめ

加えて寺小屋的に村の児らに手習いを教えていたと想像される。

平塚新田村では、山下家文書がまとまった資料として保存されている。立正大学古文書研究会の調査で明らかになったもので、同会から目録が発行されている。一部の文書は現在熊谷市の所蔵となっており、熊谷市立図書館と市史編纂室に収蔵されている。今後発行される熊谷市史資料編（近世、近代・現代）や通史編にも反映される資料が含まれているようだ。

石造物は、古文書と違い屋外にあり人目に触れる機会に恵まれるが、百年以上の時間経過とともに由来は忘れ去られてしまうことが多い。平塚新田村の先人は、村の成立と薬師堂の建設という大きな節目に関わった人たちや当たり前に日常を生き、地域の仲間と集い、協力して多くの石造物を残した。これは後世に自分たちの生活した生きた証を、石仏という「いしぶみ」に託して現代に伝えようとしているといえる。いつかは風化してしまうかもしれない「いしぶみ」を、できれば地域でも見直していただき、少しでも保護をしていただくことが、地域史の理解や郷土愛につながるのではないかと思う。